

えひめの地域づくり

— 時代背景と地域づくり・まちづくり —

愛媛大学社会連携推進機構 教授 前田 眞



[要 旨]

この稿は、私自身の地域づくり・まちづくりにかかわった端緒から、地域づくり・まちづくりにかかわっていくうえでの学びを紹介し、愛媛の地域づくり・まちづくりの変遷について、独断と偏見の中で考察したものである。

1. 地域づくり・まちづくりとの出会い

私と地域づくり・まちづくり（以下「まちづくり」という。）との出会いは、広島工業大学（以下「工大」という。）建築学科へ入学したことに始まります。事情があってというよりは勉強しなかったもので、周りの人よりも2年間遅れて大学に入ったこともあって、大学で違ったことをしないといけないと思っていました。当初は建築のデザイナーを目指していたのですが、大学の先輩と話していた時に、工大には名物の先生がいる、デザインを目指すならあの先生、農山漁村の研究をしている先生もいるなどと教えてもらいました。その中で、農山漁村の研究をされていた地井昭夫先生の研究室を訪ねて、1年生からは難しいかもしれないけれどといわれながら、そのゼミナール（以下「地井ゼミ」という。）に1年生から入れてもらうことになりました。それから地井ゼミの勉強会に参加したり、夏休みのフィールドワークに参加したりしました。建築デザイナー志望からまちづくりへと関心が移っていったわけです。

地井ゼミでの学習のテキストを渡されたのですが、それが、「実践論・矛盾論（毛沢東 1957年 岩波書店）」だったり、「孤独と愛（マルチン・ブーバー 1958年 創文社）」といった本でした。これを読みなで読み合わせたり、自分で勉強したりす

ることから、私のまちづくり活動が始まったのです。ちなみに、「実践論・矛盾論」は唯物的弁証法を学ぶものでした。それは、左翼的な思想を学ぶものでなく、科学的な視点から目の前にあるものやことをどう認識するのか、矛盾した対立物をどう統一化していくのかといった方法論として学ぶものでした。

「孤独と愛」は私にとってすごく難解な本で、何を言わんとしているのかがさっぱりわからなくて、往生しましたが、目の前に起きているものやことに向き合うことを教えていただいたものだと、自分では納得しています。本来はもっと深い考えがあるはずだと思いますが。

自分自身の地域づくり・まちづくりとのかかわりは、そんなスタートからでした。大学に入って最初の夏休みにフィールドワークへ出かけました。山口県の日本海沿岸の漁村を調査して回りました。それぞれの漁村で生活や生産を支えるための建物（用途）の調査が役割でした。暑い中、航空写真から作成した自作の地図をもって、漁村内を一軒ずつ建物を調査し、集落規模に応じた生活や生産に必要な施設の分布を調べました。さらに、景観的な特徴を把握するために、海側から見た集落全体の立面図を起こすための写真を撮るなどもしていました。これは巻物として数メートル